

上田 敏（東京大学教授）著

リハビリテーションの思想

人間復権の医療を求めて

大川嗣雄（横浜市立大学）

良い本には2種類あるように思われる。1つは、毎頁に内容と重さがあり、一頁を読み終る毎に小休止をおかないと前へ進めないような感じの本である。このような本の読後には充実感が残る。一方、読んでいる間は余り抵抗がなく、寝転んでいても読み終えてしまう。しかし、読み終てみると、もう一度今度は机の前に坐って読み直してみたくなるような本がある。このような本の読後は夾やかである。

著者の上田教授は、「リハビリテーションをを考える」（青木書店）という名著を以前に出されたが、今回は「リハビリテーションの思想―人間復権の医療を求めて」を著された。冒頭の文章に二つの本を当てはめるならば、「リハビリテーションを考える」は前者、「リハビリテーションの思想」は後者であろう。

とにかく、読んだ後で夾やかな気分させられる。

序文の中で著者も述べているように、「リハビリテーションを考える」という理論書に対して、实例をまじえて平易に「リハビリテーションの心」を伝えようとしている。

この本は、序章 私はいかにしてリハビリテーション医となったかという章にはじまる。この章では、東大を出た前途有為であったであろう若い内科医が、何故リハビリテーションなど（？）にひかれていったのか述べている。人との出会いとそれをどう自分の人生に生かすか、リハビリテーションだけでなく全ての若い医療関係者に読んでほしい章である。

次の第1章リハビリテーションの理念では、最も多くの事例が取り上げられている。その一つ一つの語り口は軽やかで、本を置く気にさせない。しかし、読み終てみると、リハビリテーションの持っている重味が頭に入っているという章である。

第2章は、リハビリテーション医学とは何かである。この中で著者は従来からいわれている復権、障害、教育的、代償的医学としてのリハビリテーション医学を易しく解説するとともに、予防医学としてのリハビリテーション医学という概念を明示した。このことは、最近になって漠然とは考えられて、来てはいたが、このように明確な概念として活字になったのははじめてであろう。

続いて第3章 障害、障害者・リハビリテーション的アプローチでは、障害の見方、そのレベルに応じたアプローチが述べられ、第4章のリハビリテーション医療を考えて、終章の「治ること」と「よくなること」へと続いている。この2章では、リハビリテーション医療の本質を語っているが、医療だけでなくリハビリテーションの全てがもらさずして語られている。

先生の多くの著書は、我が国のリハ医療関係者に少なからぬインパクトを与えて来たが、また新たな一書が加わったといえる。第24回日本リハビリテーション医学会会長の時にこの書が出版されたことを心から喜ぶたい。

（A5，頁152，¥1,400，〒300，医学書院 刊）